



2020年度 付中通信第13号

立会演説会

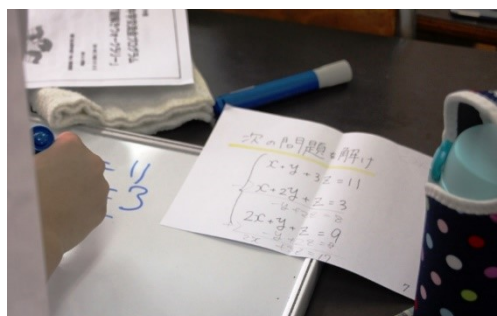
2020.12.14 (月)

高水高等学校附属中学校長 宮本 剛

9月19日20日に開催された楽学祭は、コロナ禍で工夫された今年度限りの特別な楽学祭であったことを、以前第9号でご紹介しました。そして前号では、文化祭を楽学祭へ改革した一番の眼目は、生徒会の主導、生徒の自主的な運営と企画・立案・制作・創造によって準備を進め、実施開催すること、だとお話ししました。

さきごろ、中学校生徒会の生徒会長以下役員改選

が行われました。立会演説会は、生徒会長こそ対立候補が無くて所信表明演説で終わりましたが、副会長候補(定数2)には4名が、書記(定数2)には3名が立候補し、推薦人と候補者本人の演説合わせて16名分を



生徒と一緒に聴きました。演説の上手い下手、長い短い、いろいろありましたが、十人十色、一言でいえば、なんとすがすがしい会なのだろうと、心浮き立つ気持ちになりました。

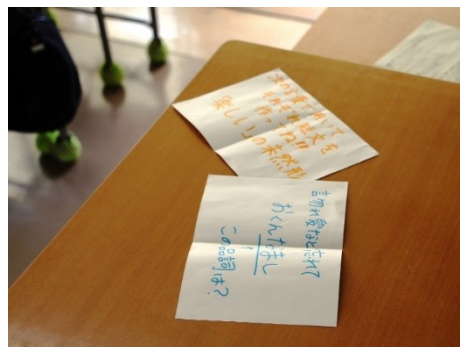
2年生26名、うち8名もの生徒がもっとよい学校にするための意見を、全校生徒の前で主張できるというのはすごいことではないのかと、かなり感動したわけです。その立候補者の中には、世界一の学校にしたい、するためには、と正々堂々



と訴える者もいました。

生徒がそういうレベルで学校を見ている以上、当然教師もそれに答えるべく、日頃の教育活動に取り組みねばならないということになります。生徒に背押される教師は、しかしながら教師冥利(みょうり)に尽きるということではないでしょうか？

この演説会に先立ち、校長挨拶の次第で私は、生徒会が元気で活躍している学校は必ずよい学校だ、と言いました。それは、本(もと)をただせば、文化祭を楽



学祭に改革するときに誓った学校作りの最もシンプルなアウトラインでもありました。



つまり、生徒会活動を通じて、生徒の自主性を引き出し、互いに誉め合い認め合う場を作る、そして自信を持たせる。そういう活動によって育まれる仲間づくりが学校を変えるし、そういう変革の方法が教育にとって今一番求められているのではないか。という思惑でした。

さて、今年の楽学祭、高校生たちの活躍ぶりについて

は9号ですでにふれましたが、中学生たちにはまだふれていませんでした。これまで「たかちゅう」は、楽学祭の中に中学独自の発表会を仕組んで保護者に楽しんでもらってきました。今年は4月以降、コロナ禍にあって新1年生と上級生との交流の場もなく、同じ学校の生徒だという帰属意識すら醸成できていないので、とにかく、先輩後輩がもっと仲良くなろうということをコンセプトに、全校生徒参加の「ウォークラリー」を企画し、半日間楽しんだのでした。(写真はすべてそのウォークラリーの一コマ)